森信三の全一学と実践 (4)

山　田　修　平

Shuhei YAMADA : The Total Philosophy and Practices of Nobuzoh Mori (4)

鳥取短期大学研究紀要　第65号　抜刷

2012年 6月

鳥取短期大学研究紀要第 65 号（2012）

森信三の全一学と実践 (4)

[1] 山　田　修　平

Shuhei YAMADA：The Total Philosophy and Practices of Nobuzoh Mori (4)

森の学問的原点は 1938 年，39 歳で著した『恩の形而上学』であるが，その後哲学五部作の一環として 1965 年，69 歳時にマルクス理論を触媒にした，いわば社会科学的視点を踏まえた『即物論的世界観』[1] を著す．

さらに 1976 年，80 歳で『創造の形而上学』[2] を中核とする全一学五部作を森哲学の集大成として著す．本稿では，まず前稿[3] で紹介した『恩の形而上学』を基本にして，マルクス理論を触媒に『即物論的世界観』をどのように展開しているのかを追い，森哲学の特質を考察する．

キーワード：森信三　即物論的世界観　マルクス主義　心身即応　物質文明と精神文化　立腰

はじめに

『恩の形而上学』は世界観体系を自証した森の最初の著書であり，学問の土台，出発点であった．森はその後学界的な不遇ならびに敗戦を契機として，民族主義的傾向の中に潜在していた思想的過誤を清算するため，内村鑑三と毛沢東に没頭する．同時に改めて西田幾多郎を学び直すと共に，贖罪の気持ちから全国行脚の旅に出る．旅で様々な社会的現実を目のあたりにし，社会科学的視点の必要性を感じとっていく[4]．そして『恩の形而上学』の戦後版というべき『即物論的世界観』を著す．これは，『恩の形而上学』が純粋な観念的立場をとるとすれば，マルクス主義を媒介として自証された体系的世界観である．

さらに森は，80 歳を越えて，心身即応，観念と物，社会が一体となった森哲学の集大成として全一学の体系を示し，その中核に愛，創造の体系を明らかにした『創造の形而上学』を著す．

本稿では先ず『即物論世界観』の要点を紹介すると共にその特質を考察する．

1．『即物論的世界観』

(1)　本書の立場と意義

森は『即物論的世界観』の序で「『恩の形而上学』が徹底した『内観の形而上学』であったのに対して「ここに到達した立場は，そのような内観的立場も，現実には，われわれ人間の身体的構造に依拠してはじめて可能というべき，厳しい現実的制約への反省に成立する」．観念論的哲学は，いかにその「自覚」内容の分析において精緻さを極めても，自覚は「現実的には人間の身体構造―端的には大脳皮質部における脳細胞組織―を所依として，はじめて成立するという現実的制約を閑却せられがち」のため，「その根底において脆弱さを免れない」とその限界を述べ[5]，この書は『恩の形而上学』の立場を，マルクス主義を媒介として，自ら展開せしめたものだ[6] と記す．

ただ，このことは全面的に唯物論の立場に立つことを意味しない．なぜなら唯物論的立場は「意識が物質を所依として発生する現実を押さえている点では，一種の手軽さがあるといえるが，しかもその点に固執するのあまり，意識をも単なる物質作用の一

種と見て，それが全宇宙をも自らの中に映現しうる霊妙不可思議さ」を見落としている．従って「唯物論は社会制度の哲学理念としては威力を発揮するが，現実界の実相を，内外の両面を相即せしめる立場とは言い難い」．従ってこの書では「現実界の内外両側面について，それぞれ一面に執する観念論ならびに唯物論の偏執をしりぞけつつ，これら両者の相即的統一を希求する立場に立つことを意図した」[7] と述べ，マルクス主義を「媒介として」また唯物論的世界ではなく「即物的」世界観の意味を明らかにする．

また本書はこうした立場で今後展開すべき『宗教的世界』，『歴史の形而上学』，『人倫的世界』および『日本文化論』等の哲学的論及に対して，一種の総序論的意義を有する[8] とする．

(2)　本書の構成と特徴

序に続いて，本書は次のように構成されている[9]．

序論　哲学とは何か
一　哲学的オルガノンの問題
二　人間存在
三　大宇宙と小宇宙
四　根源的物質と神
五　時・空の問題
六　歴史の諸問題
七　社会と国家及び人類
八　階級・搾取・革命
九　生産・労働・技術
一〇　人類文化の将来
結論　即物論的立場と動的平衡論

何れの章においても自覚から展開された『恩の形而上学』のいわば内観的，観念的立場に加え，外観的，唯物論的立場を交互交錯し切り結ぶ立場から『即物論的世界観』を展開している．

先ず哲学の定義，対象，方法を述べ，その大前提となる心身即応的人間の存在を明らかにする．次に哲学的観点から大宇宙，小宇宙観を論ずる．また関連して根源的物質と神について論究する．こうした基本的立場から時間，空間論，より具体的な歴史，社会，国家，人類の問題，さらにマルクス主義経済学の分析視点である階級・搾取・革命，およびその前提となる生産・労働・技術についても記述し，今後のあるべき人類文化の方向を示唆する．最後になぜ森が「即物的立場」に立つに至ったかの思想的変遷を振り返ると共に動的平衡論の意義を強調し，締めくくりとしている．

ここでは森のいう「即物的立場」が特徴的な幾つかの要点を考察することにする．

(3)　人間存在と即物論的立場

哲学的考察を行なう根源は，身・心相即的存在たる人間であるが，身・心相即的存在であることは絶大な驚異である．なぜなら「身体と精神という二つのまったく異質的な両面が，一種の渾然たる調和的統一態を保っている」，「しかもそのような調和と統一は，単なる静態的なそれではなく，まさに動的な調和統一であり，さらには『動的平衡』ともいうべき趣がある」[10] からである．しかも精神の複雑微妙な心意作用は，現実には身体構造，具体的には大脳の構造に依拠して行なわれている．霊妙な心意作用自体を観念論的驚異と呼ぶならば，心意作用が身体構造に依拠していることは即物論的驚異と言える．しかもそのような意識作用は，少なくとも発生的には生命現象の無限系列に基づき，究極的根源に遡れば，結局は物質に負うと言わざるを得ない[11]．

即ち「身・心相即作用の成立が，発生的には物質より生命へ，そして生命よりさらに意識へと，しだいにその発現的次序が高次元化している」[12] と述べる．

このように見るとき，従来の観念的哲学は意識の基盤が身体構造に立脚していることを見逃している．しかし他方唯物論的哲学は「物質から意識が発生する」といっても，「無条件的な単純さ」において肯定はできないし，まして「意識の霊妙な作用」を説明できない[13]．物質から生命，生命から意識作

用の根源に「根源物質」ともいうべき存在を認めざるを得ない[14].

森は根源物質について「たんに意識と相対的な科学的物質ではない」,「宇宙の根本原質として，そこに無量の生命を育成せしめる，無限の可能的エネルギーが包蔵せられているという意味」，結局は「無限なる創造的意志を内包する『大自然』と呼ぶをもって至当」[15] と説明する.

その上で,観念的哲学はいわば自観の立場であり,唯物論的哲学は他観の立場といえるが，この両面から人間存在を捉えるのが即物的人間観である[16] とする.

(4) 大宇宙と小宇宙

大宇宙は上記のように物質から生命，さらに意識を育む，そしてその根源に根源物質ともいうべき創造的意志と力を有する．これと同じように大宇宙の中では極微ともいうべき人間を３つの側面から小宇宙に例えることができるという．１つは「客体化できない絶対態照光のもと自己の存在を明らかにする主体者としての自覚力をもつこと」，次に「受胎，出産から人間の成長過程に大宇宙の育成過程が濃縮されていること」，そして「芸術，また教育に象徴されるいわば第２の造化・創造的作用をもつこと」である[17].

さらに大宇宙と小宇宙たる人間は相互限定の関係にあるという.「即ち宇宙的生命の万有に対する限定は，いわゆる形相化としての分化生成である」[18] が，人間の宇宙的生命に対する逆限定は「万有に対する認識と享受」[19] だという．そして認識作用が一種の限定作用であることは明らかだが,「享受はある意味では，認識以上にその深さをもつ一種の限定作用」[20] だとする．続けて「しかも万有はこのような相互限定的関連において，そこには絶大なる動的平衡関係」が保たれている.「これが動的平衡論」[21] というべきものである.

(5) 神と根源物質

森は神と根源物質の関係について次のように述べる．根源物質は根本力源であり,「大自然の無限なる創造的意志」[22] といえる.

ところで神概念は内在神観（汎神論）と越神観（有神論）に大別できるが，根源物質の立場は結局広義の内在神観，汎神論の立場である.「人間存在の根源を，いわば客体面に添いつつ朔源すると意識，その主体となる肉体を人間，生物，物質へ辿りつき，さらに相対的な科学物質の根源として絶対的質量，即ち根源物質」に到達する．他方内観自省の立場に立つとき「見られる我を見る我をさらに見るもの」[23] に到達せざるを得ない．心身二元的構成体であるわれわれ人間は自覚的行為，動的実践的体験によって，両者の一如を自証することができる．ここにおいて神と根源的物質は同じものだと感得するという.

森は続けて，生と死，さらに性ついても論を進める.「われわれの人間の生誕は，現実には無量なる父母を通して如是の『創造的意志』のはたらくが故という他なく，現にこのことは，それが両親の絶対的な自由意志によるものではない」.このことは「われわれを生んだ父母自身もまた，それぞれに如是の絶対的根源力によって，この地上に，『生』を享けた一被造物なることによって明らか」と大自然の無限なる創造的意志による命，生を説明する[24]．また死については「畢竟するに如是の限定からの解除であり，換言すれば個体的限定からの全的解放ともいうべきもの」，しかしそれが「とかく無限の苦悩として感ぜられがちなのは，結局われわれ有限存在にあっては，その有現知のゆえに，如是の消息を真に洞見体解し難い故という他ない」[25] とする.

性について「『根源物質』の内包する無限の創造的意志は，その万有の創造育成にあたって，つねに二種の異なった異質的契機を使用することを忘れぬ」,「生命を生み出すための深き用意」[26] とその本質を説明しつつ,「われわれ人間に仕掛けた最大最深の『トリック』」[27] と恋愛感情についても言及する.

⑹　歴史と社会

森は即物論的立場から，『恩の形而上学』で示めした時・空論をより具体的に展開し，歴史と社会について論及する．

特徴的と思われる諸点を記すことにする．

「歴史の問題は」「結局は具体的時・空の交錯を，いわば時間的観点から把握したもの」[28] と定義づけた上で，歴史の幾つかの問題について述べるが，特に歴史の始源と歴史の進歩の捉え方が大きな課題だとする．

先ず歴史の始源についての叙述には，全自然史の立場と神話の立場があるが，いずれにしても歴史の根源的エネルギーの問題に関わらざるを得ない．そして詰めれば根源物質に行きつくと説明する．この場合，根源物質は，哲学的物質ともいえる[29] という．

歴史の進歩については結局その基準をなにに置くのかが問題である．歴史が一般に無条件に進歩するように考えられがちなのは，「第二次世界大戦後の世界的な技術革命の影響」[30] が大きい．「その客観性と普遍性」という特有の性格ゆえに「現代の自然科学文明が，一応無限の進歩を約束せられているかに考える」のは当然ともいえる．しかし「自然科学文明はその本質において，人間の内面的世界の消息については，必ずしも主要関心事ではない」．その結果「巨大なる統一性と複雑化」，「非人間的性格」によって，「人間生活に対して一大威圧を加え出した」．その端的な具体例が「原子爆弾の発明」である[31]．

人間を主体においた進歩の基準が考えられなければならないが，ヘーゲルは「自由」の進歩と考え，マルクスは「経済的貧困による人間の自己疎外からの回復」をもって進歩の基準とした．両者の生きた社会状況，社会的立場がその背景にはある．ヘーゲルは概念的，マルクスは経済的な，いわば両極的ともいうべき観点の相違はあるが，もしそこに共通なものがあるとすれば，「人間の本質的平等性の実現といってよいであろう．」[32] と心身即応の立場からの歴史の進歩の基準を示す．かくして森は「動的平衡論」ともいうべき一種の哲学的歴史観に辿りついた[33] という．ただ「人間の歴史は無限の流動的展開」であるがゆえに，そこに「絶対的進歩というのは容易」なことではない[34] ともする．

社会については，その「概念」において「その最重要契機」は，「その構成単位としての個人，並びにそのような個人の無量集団たる社会の構造的原理」[35] とするが，この個人と社会いずれが先行するかの前後論は非常に難しい．遥か歴史を遡っても「人類の始祖の出現は，そのまま最小単位の社会集団たる家族集団の出現を意味」する[36] と述べ，このことは「観点を変えて考えれば，生命の多元的発現の謂いだともいえる」[37] とし，生命の特質から個人と社会の不可分，密着性を強調する．

その上で人類の始祖の出現，各種の部族的集団の成立と拡大，また分散的発展，そして国家形成の過程を辿りながら，民族と国家の一致，不一致のある複雑な要因があること[38] に言及し，さらに原子爆弾をもってしまった人類を前提に，国家主権の相対化，他方新興国家郡の台頭等，第２次大戦後の世界の未来予測[39] をする．

ここには観念的哲学ではなく生きた人間，社会を見つめ，具体的生き方を模索する全一学者としての森の立場が明らかに示されている．

⑺　階級・搾取・革命

この章で森は正面からマルクスの理論に向かい合う．マルクスの偉業は歴史上はじめて搾取史観を確立した点にある．独自の世界観体系の上に立って，総合的，組織的にもろもろの社会悪の内包している根源的矛盾を明らかにする共に，さらにこれが絶滅の具体的方策を示した[40]．

マルクスによれば，社会悪の根源は「支配・被支配的関係に立つ階級分裂」にあるが，「その階級差を，単なる支配的権力を基準として見るばかりでなく，さらにそれを支えている現実的基盤として，そこに経済的搾取の罪悪性」を明快に示したところに「哲学及び経済学から出発したかれの独自の創見があ

る」[41] と高く評価する．ただ，「このような搾取の罪悪性の絶滅策として「階級廃止の具体的方途」としての「革命論」については疑義を呈する．マルクスによれば「資本主義の発達の極その内部矛盾の激化の招来し，そこに必然に資本主義社会の崩壊をする」というが「世界的現実をみるとき，今日までマルクス主義の原理に従って革命を成功せしめた国々は，ソ連邦にせよ，中国にせよ，はたまた北朝鮮にもせよ，何れも革命以前のその国の生産状態は，いわゆる『産業革命』以前の低次段階にあった国々」[42] だと指摘する．さらにそれら共産主義国群においては独裁政権の問題が生じている[43]．

このように森は，人間社会の根源としての搾取の深刻さを深く捉えた現実的，体系的な世界分析としてマルクスの理論を評価するが，しかし搾取は，マルクスのいう革命では解決できない人間により深く内在する社会的な根源問題だとする．

(8) 生産・労働・技術

人類における生産の意義についても論及する．生産には大きく２つある．１つは「大自然たる『根源物質』の創造作用」であり，いま１つは「そのような大自然の創造作用の上に立ちつつ，さらにそこに包蔵せられている無量の意義を洞見し，かかる造化の大用を踏まえて，そこに第二の創造的世界を現成」することである[44]．「そのような第二次的造化の作用とは，これは端的に，結局われわれ人間が営む生産作用の謂いに他ならない」という．このような自然の作り出すものを素材にして生産をすることは，農業分野は勿論のこと，近代的な工業分野においても行われている．ところがこうした人間の生産行為が無限に発展し，留まるところを知らないと，例えば過度の機械文明は，自己疎外を招くというような大きな問題を招くことになる[45]．

ところで「人類の歴史は，いちおう生産の歴史」であり，生産を「支えている現実の基盤からは，ついには労働の歴史」といえる．そして「これを内面から支えるものとして，いわゆる『思考史観』」が考えられなければならいない[46] という．

さらに生産と労働の関係については「一おう類縁的な概念といえるとしても，それは決して完全に重なり合う概念ではない」とする．手工業時代，農業本位時代から機械生産的な時代に移りかわることによってそのかい離が大きくなった．なぜなら「生産力の増大が労働者の酷使にとならぬために，しだいにこれを技術化し，さらに機械にとって代わられていくというのが，いわゆる機械文明の志向しつつある大流」[47] であるのだが，しかし機械文明には，無限の前進性，無限の複雑化と無限の画一化，その延長に非人間的非情性といった根本的な性質がある．この結果，人間を圧迫する人間疎外，また機械文明を介してより大きな搾取が行われる要因になっている[48] と論ずる．

このような問題にどのように対応すべきか．

１つは，「直接そのような人間疎外的事象と取り組む」政治的解決を進めること，そしてより根本的には「第一次的造化の大用」に顧念を忘れないこと，換言すれば大自然への畏敬の念と配慮をもつことだ[49] という．

なぜなら「生産作用のすべてが，人間の思考作用に裏付けられている」「地上には人間の思考作用の随伴しない如何なる生産作用も在りえぬ」．従って「思考」のあり方が問われる[50] と強調する．

(9) 人類文化の将来

将来を考えるにあたって，「文明」と「文化」その必然的帰結として「物質文明」と「精神文化」との問題について言及する[51]．そして現在物質文明の基盤となっている自然科学文明の本質的性格として「部分の積み重ね」，「絶対的非後退性」を示す．他方精神文化は「つねにそれを支える主体が予想される」，物質文明における「量産化は許されず」，「個性的主体が予想される．」[52] したがって物質文明と精神文化の平行の難しさの問題が生じると前記の問題を再度強調する[53]．

この打開のため，精神文化の中から政治，教育，

宗教の領域からの対応を示唆する．

要点を示せば「政治の究極的理想としては一おうの人間的自由の確保の上にたちつつ，如何にして人類の経済的搾取を根絶するか」である[54]という．

教育の目的は「一方からは，一人の人間における生命の開眼をその使命とすると共に，さらに他の一面からは，それは人類文化の伝承と展開」である．その場合「人間性の本質的平等性の開眼に立脚しつつ，さらにそれぞれの個性的伸長に努力する」ことが重用だとし，教育の立場からも経済的搾取の軽減ないし根絶への努力を促す[55]．

宗教については，それが現代において重要性を失った原因は，自然科学文明の発展，マルクス主義の浸透以上に，宗教自身の問題だとする．なぜなら「人間に『死』という絶対的事実が不可避なかぎり，われわれ人類から，宗教的希求の念の喪失する期はない」．いまこそ宗教は「謂わば教条主義に唱えてきた『死して後甦る』という宗教的真理を，今や翻身一転，これを現実に即して，自らの上に適応すべき」だ[56]とする．

続けて森は，人類の最大課題，自然科学文明と精神文化のギャップに対応する政治，教育，宗教の役割だけではなく，今すぐ我々自身が「主体性を回復」しなければならないと具体策を提言する．

１つはマスコミへの対応である．無駄な情報に振り回されている．出来る限り新聞，雑誌の数を減らすこと，テレビ視聴のルールをつくることだ[57]という．

今ひとつは「つねに腰骨を立てる」ことだという．人間は心身即応である．身体の主体確立は精神の確立となると「現実に可能な」対応策を示す[58]．

⑽　動的平衡論

森は終章で，即物論的立場に至る思想的遍歴[59]を振返ると共に，即物論的立場と動的平衡論の関係ついて述べる．

即物論的立場とは「一言にして，内に深く宗教的関心を秘めつつ，しかも他面社会的政治的関心との切り結ぶ一線を，常に現実生活の上に求めようとする立場」，そして「両極的希求を交錯せしめつつ，念々これを切りむすばせながら歩む，無限なる動的立場」，「従ってそれは，しばしば見受けられるような，単なる宗教的体験の論理化をもって哲学と考えるような立場でもなければ，また単に公式論的に，いつ如何なる時代にも暴力革命をもって，唯一可能な絶対的真理であるかに錯覚する一部の人々よりも，はるかにきびしく，その生命の凝固の許されない立場」[60]だという．その無限なる動的立場から「つねに人間存在を囲繞する，内外両面の無限に錯綜する諸矛盾を凝視しつつ，ついにこの宇宙間には，無限に複雑なる矛盾と相克を通して，そこに絶大なる一種の動的平衡が支配している信証に達した．」[61]それは「一栄一落の真理」を示す「易の哲理」に通じる[62]．そこには宇宙生命の動的螺旋的展開と動的平衡の理が働いている[63]という．

おわりに

上記のように，森は『恩の形而上学』は観念的哲学体系だったとし敗戦を契機に，思想的反省を行い，マルクスの唯物主義を触媒として『即物論的世界』を著す．

即物的世界の立場は観念論的立場でもなければ，唯物論的立場でもない．まさにその双方を切り結ぶ立場といえる．

人間は心身不離，心身即応の存在である．即物的世界観はここから出発する．また人間の歴史を即物的に辿れば根源物質に到達せざるを得ず，宇宙的生命，神の実在を確証するに到る．

森の哲学は，常に現実の只中に存在する人間を見詰め，現在と将来の人間社会のありようを，内観と外観の視点から問いかける．精神文化と物質文明の関係について論及する．人間社会の最大の問題は内的外的両面における搾取の問題と，それを加速させ，複雑化させる機械文明と精神文化のギャップの問題だとする．その解決の為に，政治，教育，宗教から

の具体的な社会科学および人文科学的アプローチを示すと共に,一個人としての主体的生き方として「立腰」を提言する.

このように森の哲学は，まさに生きた現実を踏まえ，全一的であり，具体的，実践的である.

次稿では森哲学の集大成である全一学の中核となる『創造の形而上学』を踏まえた教育論と実践論を提示する『修身教授録』を中心に考察する.

注

1）森信三「即物論的世界観」『森信三全集第三巻』実践社，昭和 40 年 10 月

2）森信三「創造の形而上学」『森信三全集（続篇）第一巻』実践人の家，昭和 58 年 3 月

3）山田修平「森信三の全一学と実践(3)」『鳥取短期大学研究紀要』第 64 号，2011 年 12 月

4）前掲『即物論的世界観』pp. 229-230. 参照
山田修平「森の全一学と実践(1)」『鳥取短期大学研究紀要』第 62 号，2010 年 12 月，p. 6. 参照

5）『即物論的世界観』pp. 1-2. 参照

6）同上 p. 1.

7）同上 pp. 1-2.

8）同上 p. 1. 参照

9）同上 pp. 5-10.

10）同上 p. 54.

11）同上 pp. 57-58. 参照

12）同上 p. 58.

13）同上 pp. 58-59.
寺田清一編『森信三先生　全一学ノート』実践人の家，昭和 54 年 3 月，p. 80. 参照

14）前掲『即物論的世界観』p. 64. 参照

15）前掲『森信三先生　全一学ノート』pp. 80-82. 参照

16）前掲『即物論的世界観』p. 61. p. 62. p. 64.

17）同上 pp. 70-73. 参照

18）同上 p. 75.

19）同上 p. 75.

20）同上 p. 75.

21）同上 p. 77.

22）同上 p. 110.

23）同上 p. 105.

24）同上 pp. 110-111. 参照

25）同上 p. 111.

26）同上 p. 114.

27）同上 p. 115.

28）同上 p. 138.

29）同上 pp. 144-148. 参照

30）同上 p. 150.

31）同上 pp. 150-151. 参照

32）同上 p. 154.

33）同上 p. 153. 参照

34）同上 p. 156.

35）同上 p. 157.

36）同上 pp. 159-163. 参照

37）同上 p. 163.

38）同上 pp. 163-169. 参照

39）同上 pp. 169-172. 参照
森が本書を著したのは，1965 年でその後 50 年以上経ているが，森の予測は的を得ている.

40）同上 p. 176. 参照

41）同上 p. 177.

42）同上 p. 180.

43）同上 p. 182. 参照

44）同上 p. 190.

45）同上 p. 191. 参照

46）同上 p. 193-194. 参照

47）同上 p. 197.

48）同上 pp. 201-204 参照

49）同上 p. 191.

50）同上 pp. 192-193. 参照

51）同上 pp. 205-208. 参照

52）同上 pp. 209-210.

53）同上 pp. 212-213. 参照

54）同上 p. 214.

55）同上 pp. 214-215. 参照

56）同上 pp. 215-216. 参照

57）同上 pp. 223-224.　参照

58）同上 p. 224.　参照

59）森の思想的遍歴については，山田修平「森信三の全一学と実践⑴」『鳥取短期大学研究紀要』第62号，2010年12月，同「森信三の全一学と実践⑵」同第63号，2011年6月で森の歩んだ道を振返りながら紹介した.

60）前掲「即物論的世界観」p. 235.

61）同上，pp. 240-241.

62）同上，p. 241.　参照

63）同上，pp. 242-243.　参照